

13) エビネ＝蝦根

エビネは漢字では海老根もしくは蝦根と書き、ラン科の多年草である。日本各地の山野に自生し、シュンランとともに最もなじみのあるラン科の一つといえるだろう。この植物の根には節が多く、ちょうど海老の形によく似ているところからこの名前がつけられた。4月頃花茎を伸ばし直径3cm ぐらいの花を総状に10 数個つける。学名は『*Calanthe discolor*』で、属名は「calos=美しい」「anthos=花」との合成語で、種小辞は「2色の異なった色の」という意味で、唇弁と他の花弁の色が異なっていることを現わしている。また中国での呼称は『蝦背蘭』である。

エビネが最初に見える日本の文献は、15世紀末に大沢久守によって著わされた『山科家礼記』(ヤマシナケライキ)で、生け花に用いたと記されている。江戸中期になると多くの花道書にエビネを生けた記録が見え、当時花材としてしばしば用いられたことがうかがえる。水野元勝が著わした日本最初の園芸事典である『花壇綱目』(カダンコウモク)には、江戸時代に盛んに栽培されたことが記されており、この頃新品種も数多く開発されたものと思われる。しかし明治時代になると文明開化の流れの中で、植物までが西洋化され、一部の好事家にしか栽培されなくなってしまった。それが昨今の山野草ブームに乗って、この花の地位は急速に高まり、今では約250種がエビネ協会に登録され、現在も増え続けている。しかしその一方では野生のものは激減し、一部の保護地でしか見られなくなってしまった。残念である。しかし神奈川県町田市には市が運営する『町田エビネ苑』があって、キエビネ、肥後エビネ、肥前エビネ、タカネエビネ、霧島エビネ、ナツエビネ、サルメンエビネなど10万株のエビネと、花の季節にはクマガイソウの花も堪能できる。

戦中戦後にかけてエビネに人生を捧げたのは、「植長」こと宮内長次と、彼を経済的に支えた梅木賢統氏である。四国松山の人で、植長は四国のみならず九州まで足を運んで珍しいエビネを探し歩いた。一説によればヒゼンエビネの一変種と思われる「丹頂」を探し当てたのもこの植長だったという。宮崎県の山から採取して、これを『京都園芸倶楽部』の及川義夫氏のところに持ち込んで当事の金で1,000円で売ろうとした。今だったら約100万円である。さすがに及川は決断しかねていたが、帰りに及川の自宅によって、酒とソバをご馳走になると、植長はその帰りに「これ、あんたにあげるわ」と言い残して、ただで置いて帰ったと言う。そしてこれに『丹頂』と命名したのはかの牧野富太郎博士であった。

エビネは大きく分けると春咲き種、夏咲き種がある。園芸店でよく見られるものは、エビネ、黄エビネ、猿面エビネ、霧島エビネなどで、ランの中では比較的楽に栽培でき、庭に植えばなしにしてもよく花を咲かせてくれるものも少なくない。しかし湿気の多いところや陽あたりの良過ぎるところは避けた方がいい。肥料分もあまり必要としないが、油粕の完熟したものを与えるとよく花を咲かせてくれる。



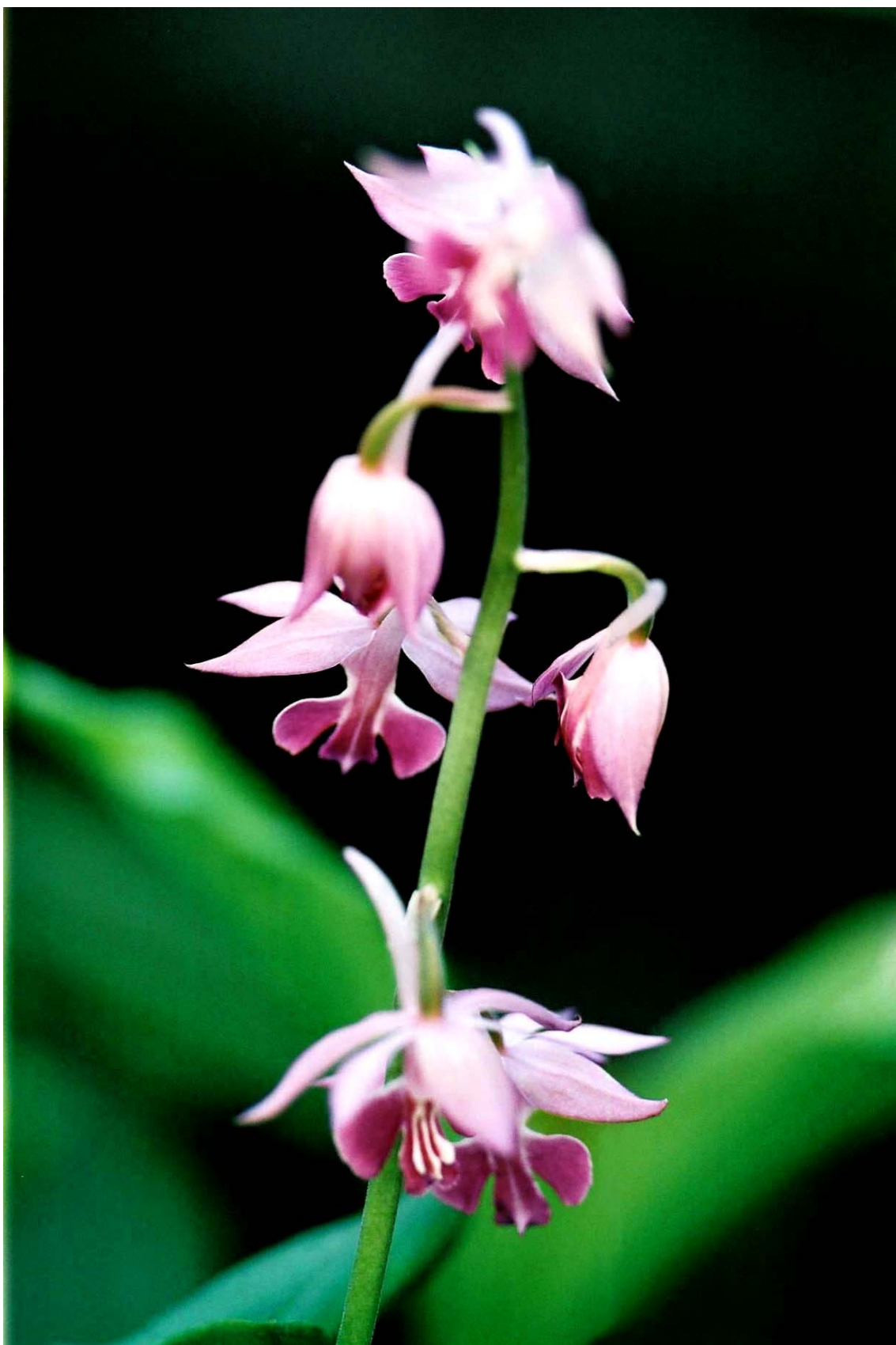
咲き始めたエビネ『丹頂』、「植長」こと宮内長次氏が発見し、牧野富太郎博士が命名した。



エビネは種類も多く、また愛好家も多い(栽培種)。



よく見るエビネは茶色っぽい地味なものだが、園芸品には華やかなものが多い。



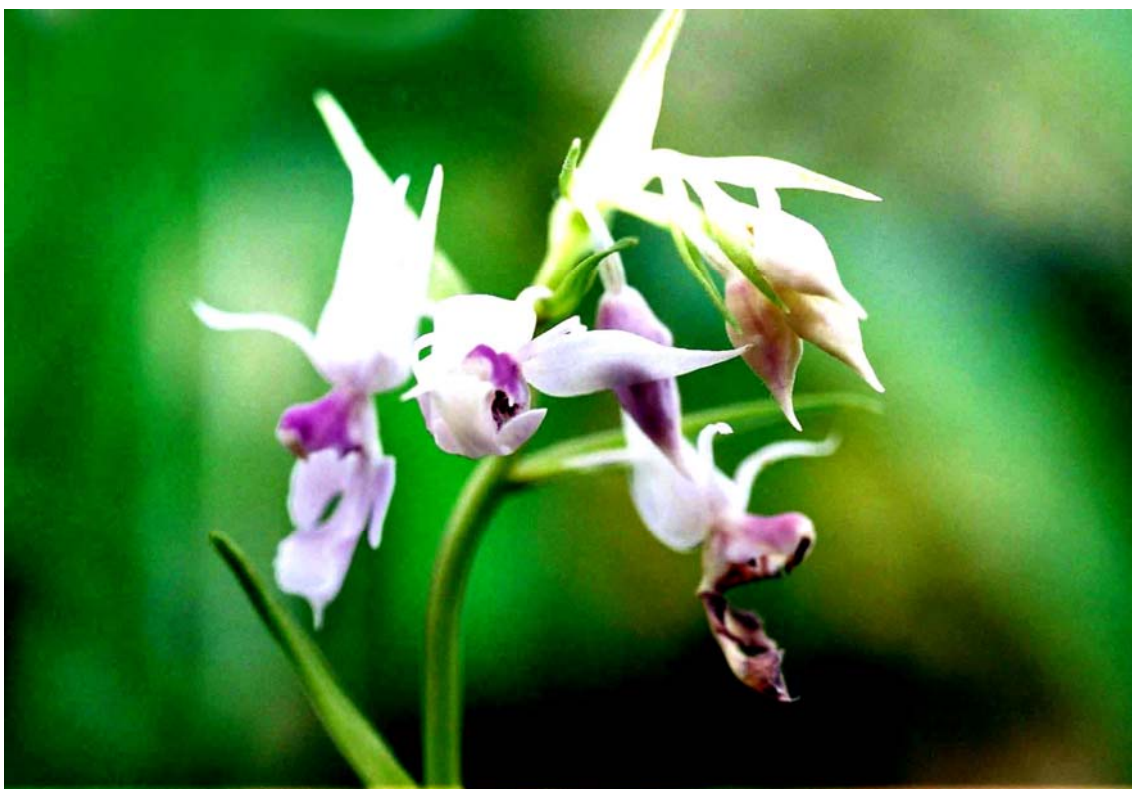
これもそんな華やかなエビネである(栽培種)



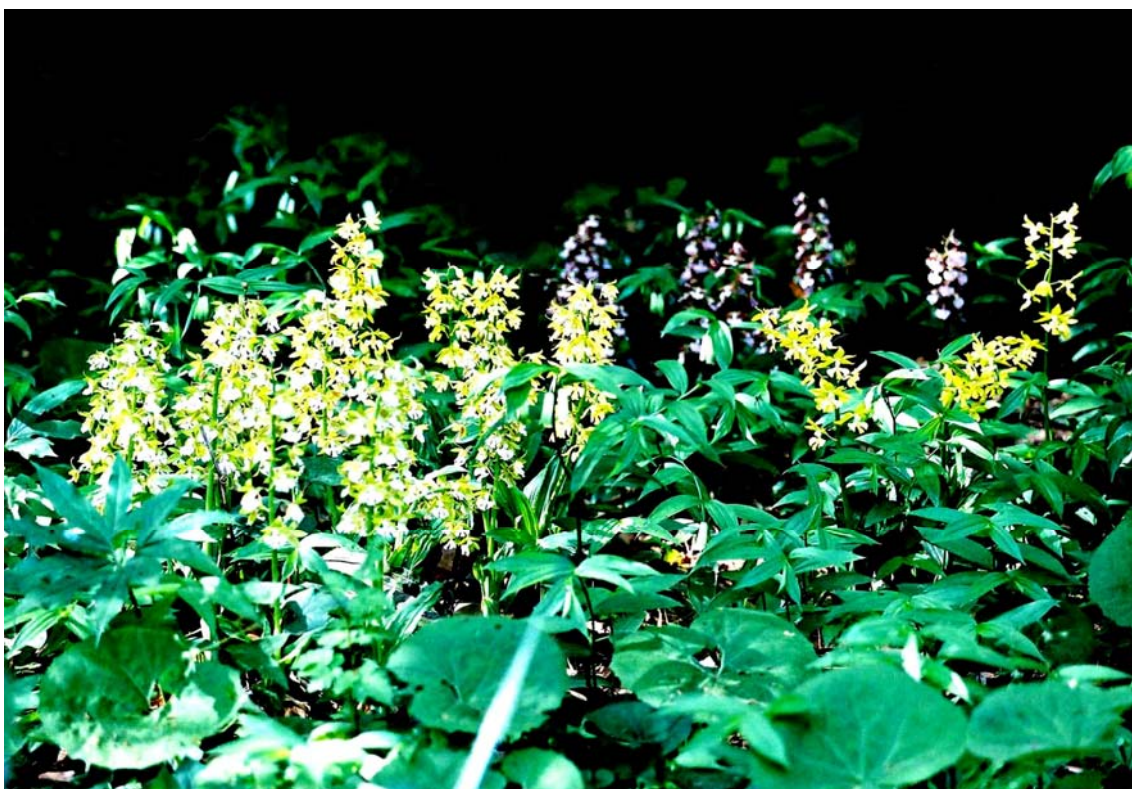
エビネの中では一般的な黄エビネ(埼玉県深谷市)



出自は不明だが、エビネの中でも他を凌駕するほど鮮やかな花だった(埼玉県深谷市)。



ナツエビネは北海道南部から九州にいたる、やや高地の山林中に自生し、花は7月から8月の暑い最中に開花する。しかし暑さには意外に弱く、暑すぎると開花しないこともある(栽培種)。



尾島邸に自生するエビネ。奥にはクマガイソウが群生している(さいたま市見沼区)。 [目次に戻る](#)